

平成 27 年度 中学校教育専門部会県外視察研修会 報告書

1. 目的

- ① 大学入試改革における新学力観に対応した教育実践のヒントを学ぶ。
- ② 21 世紀というグローバル社会を生き抜くために必要な人材の育成方法を学ぶ。
- ③ IB(国際バカロレア)教育と国際的バカロレア資格の取得について学ぶ。
- ④ 外国大学の AO 入試について学ぶ。

2. 日 時 平成 27 年 6 月 16 日(火)

3. 視察校

①東京インターナショナル・スクール

住所: 〒106-0047 東京都港区南麻布 2 丁目 13 - 6 TEL: 03-3791-4683

②テンブル大学ジャパンキャンパス

住所: 〒106-0047 東京都港区南麻布 2-8-12 TEL: 0120-86-1026

4. 参加者

部会長: 石田 邦明 (静岡学園中学校・高等学校 校長)・副部会長: 山本 岳弘(静岡学園)

委 員: 平山 三穂 (不二聖心女子学院)・能勢 和幸 (星陵)・築地 いそ江 (静岡雙葉)

杉森 正弘 (静岡聖光学院)・影山 静雄 (西遠女子学園)・藤森 章弘 (浜松日体) 8 名

5. 視察報告①

〈東京インターナショナル・スクール〉

1. 設立・沿革

1994 年 プリスクール設立(目黒区下目黒: 生徒 5 名)

1997 年 初等部設立(目黒区目黒本町: 生徒数 12 名)

2001 年 港区三田 4 丁目に移転(145 名)

2002 年 中等部設立(生徒数約 190 名)

2004 年 港区三田 旧・南海小学校に移転(生徒数 235 名)

CIS/NEASC 認証取得

2006 年 IB/PYP 認証 アップル・コンピューターの教育における IT 活用モデル校

2007 年 IB/MYP 認証

2013 年 現校舎(港区南麻布)竣工・移転(生徒数 309 名)

2. 教育の特色

(1) 教育理念・基本方針

「世界中、どこの国においても自分の責務を果たすことができ、自信にあふれ、柔軟かつバランスのとれた
独立自尊の精神をもつ人間を育む。」

*To nurture confident, open-minded, independently thinking, well-balanced inquirers for global
responsibility*

(2) 教育内容〈教育の特色(カリキュラム、教育方法等)〉

国際バカロレア(IB)のカリキュラムに基づき、独自の『探究型プログラム』による教育を展開。

各学年とも、年間 6 つのテーマを設定し、理科、社会、算数・数学、国語等の科目に捉われない横断的な
学びを以下のような一連の流れで実施している。

- ・教師が生徒に対して学ぶべき核(コア)となる考えを提示
- ・核(コア)に対して、生徒がこれまでに知っている知識を共有
- ・生徒が新たに学びたいトピックの提示
- ・各種教材・インターネットの活用、人物へのインタビューなどを通してリサーチ
- ・学んだ内容を様々なメディア(新聞、ポスター、パンフレット、ビデオ等)使ってとりまとめる
- ・まとめた内容をプレゼンテーション(生徒間での知識の共有)
- ・自分自身の学習の振り返り

IB の初等プログラム(PYP)と中等プログラム(MYP)の認証を受けているため、国際的な基準に合わせた各学年に必要な知識及び人格の形成を促しており、世界のどこの国の IB スクールに行っても、遜色なく学習を継続出来る能力を身につけられる仕組みで指導が行われている。

(3) 国際的に認められた教育機関

学校の運営方針、運営実態、財務状況、施設・設備、保護者との関わり等、多方面からスクールが国際的な教育機関として一定の基準を満たしているかを認証するインターナショナルスクール連盟(CIS)認証を取得済。定期的に運営状況等の監査が実施されるため、絶えず教育機関として質の維持・向上に努めている。

[参考・引用]

配布資料 「東京インターナショナルスクール 概要」

『世界で生きるチカラ 国際バカロレアが子どもたちを強くする』 坪谷ニューウェル郁子著 2014年4月3日第1刷発行

6. 視察報告②

〈テンブル大学東京キャンパス〉説明担当者: 加藤智恵・竹本正二郎

米国 Philadelphia にある Pennsylvania 州立総合大学、Temple university の日本 Campus。

1. 設立・沿革

1982 港区芝公園に開校、集中英語課程(IELP)・教育学英語教授法(TESOL)修士号課程を開設。

米国大学初の日本校開設

1983 大学学部課程を開設。日本を離れることなく米国大学の単位を修得し、米国本校と同じ学位(準学士号・学士号)を取得、卒業することが可能に

1984 渋谷区に移転。準学士号第1期生が卒業

1986 学士号第1期生が卒業

1987 新宿区に移転

1988 教育学英語教授法(TESOL)博士号課程を開設

1992 八王子市南大沢に移転、高田馬場校開設。

1996 米国本校直轄の大学として再スタート。南大沢キャンパス、高田馬場キャンパスを統合して港区南麻布に移転。

2005 文部科学省より、初の「外国大学の日本校」としての指定を受ける。

2012 開校30周年。武蔵大学と単位互換プログラム開始。

2014 東洋大学国際地域学部と交流協定を締結、明治大学文学部と単位互換プログラムを開始、英語圏の大学圏の大学進学・留学を目指す中高生向け「武蔵テンブル RED プログラム」開校

2. 教育の特色

Global な世界を舞台に活躍出来る人材を育成するため豊かな創造力(creativity)、独自の分析力(Critical thinking)、円滑な Communication 力(見る・聞く・話す)を育み、伸ばし、Good Citizen(善良な市民)の育成のため真の国際 Liberal arts(教養教育)の目的を実現する。

3. 米国の大学では何を重視するか

(1) 大学教育の目的

- ・ Liberal Arts(一般教養)…口頭言語能力、作文能力、論理展開能力を発達させる包括的な学問教育を目指す。
- ・ Good Citizen(善良な市民)、社会に貢献出来る大人を育てる。
- ・ 学んだ知識を使い、社会でどのように使えるようにしていくかを考えられる人材の育成。

(2) 4つの力の育成

1. 思考力を働かせ自分の意見をまとめる「Creative thinking」(創造的思考力)
2. 論理的に考える「Critical thinking」(分析的思考力)
3. 考え方を他人に伝える Communication 力(聞く・書く・話す)
4. Problem solving(問題解決)能力

(3) 参加型授業。

1. 授業前の Reading、Research の宿題に取り組み、課題についての理解を深める。
2. 授業で教授の講義や他の学生からの意見を聞き Discussion をし、自分の考えを発展させる。
3. さらに Research や Group work を行い、意見をまとめる。
4. 自分の意見や考えを他者に伝える。1枚の Report または 30枚の小論文にまとめたり、Presentation や Speech といった Communication をとる能力を養う。

4. 柔軟な米国の大学制度

(1) 入試

① 大学数の比較

- ・ 米国の大学の数は 2014 年の統計で 4599 校(日本は 740 校前後)。
- ・ 4 年制大学は 2870 校と全体の 6 割(公立: 25%・私立: 75%)
- ・ 2 年制大学は 1730 校と全体の 4 割(公立: 67%・私立: 36%)

② 出願準備

- ・ 高 2 になると大学の Research をして出願校を確定し、高 3 の 4~6 月に出願し、7 月に合否発表。

③ Rolling Admission

- ・ 入学試験を行わず、書類選考により合否が判定される。
- ・ 大学は通年で願書を受け付け、随時書類審査を行う。
- ・ 生徒は秋学期(8 月下旬入学)、春学期(1 月入学)、夏学期(5 月下旬入学)のうち希望の入学時期を選び、出願が可能。
- ・ 秋学期を希望する生徒は 3 月 1 日に出願を締切る。
- ・ 合否は 2~4 週間以内に出される。

④ 出願書類

- ・ 入学願書(紙媒体のものもあるが、On-line 出願も可)]
- ・ 標準テストの Score 票

→ SAT または ACT のどちらかを受験。受験機会は年複数回あり Best な得点を提出すればよい。

→ 留学生の場合 TOEFUL または IELTS の Score を提出。但し、一定の条件を満たしていれば免除される。

SAT(大学進学適正試験)…米国外の各地で年6回実施される多肢選択方式の試験。論理的読解力、数学的能力、文書作成能力を測定。

ACT(米国大学入学学力試験)…ACT社が運営する試験。年間最高5回まで世界各地の試験会場で実施。多肢選択方式の試験。英語、数学、読解力、科学的論理思考力を測定。任意で小論文もあり。

TOEFL(外国語としての英語のTest)…英語を母語としない人が学問の場で英語による意思疎通出来るかどうかの能力を測定する試験。近年はInternet版(TOEFL iBT)が主流。「読む」「聞く」「話す」「書く」の4分野に分かれ、On-line試験Networkに接続したComputer経由で実施。

IELTS(国際英語力試験)…「読む」「聞く」「話す」「書く」の4分野の英語能力を評価する試験。読解と作文については、「Academic」と「General training」に分かれる。

- ・出願 Essay … 出願者の Background、過去の重要な経験や出来事、強い関心のある事柄、学業や Career における目標など入学審査部(Admission)に Appeal したいことを英文で書いたもの。
- ・成績証明書、卒業証明書、推薦状…いずれも英文で書かれたもの。

⑤Common Application

- ・複数の大学で利用出来る共通の出願 System(On-line 願書)。近年主流になりつつある。
- ・全米の約 490 校の大学で採用。

※日本でも四国の5つの国立大学で平成16年度から同様の出願方法を採用。

⑥審査項目

- ・学業成績
- ・標準テストの点数
- ・出願 Essay の内容→Admission office の担当者が1通1通目を通す
- ・Advanced Placement Test の Score
→大学進学準備 Program で高校の教員が高校で行う大学の教養教育 Level の Program で毎年5月に試験を実施。試験の Score が一定以上であれば大学1、2年時の単位が免除される。米国の公立高校の生徒の3割が受験し、近年3600を超える世界の大学が Score を参考にしている。参加者も増加中。
- ・国際バカロレア(IB)の DP 修了の有無と Score
→「世界統一試験」で一定の Score を取得していれば1年次の単位免除や2年への飛び級もある。
- ・教員からの推薦状→生徒会活動等の役員としての活動または部活動等での活躍・成績を評価
- ・面接→Skype を活用
- ・課外活動経験→Volunteer 活動や音楽、美術などの活動についての評価も重視
- ・On-line ID の確認→Twitter、Facebook など SNS の Account を確認する。

⑦Admission office

- ・UTJ では年間数百名が出願してくるが、3名(1名は教員も兼ねた Director)で対応している。
- ・米国本部校ではもっと規模が大きい。

[参考・引用]

テンプル大学ジャパンキャンパス入試要項・大学紹介パンフレット

『米国留学を目指す人のために 大学学部課程』

米国大使館 広報・文化交流部 アメリカンセンターJapan 編集・発行 2014年5月第2版2刷)

7. まとめ

21世紀は情報社会であり知識や情報は Internet を使うことが出来れば容易に手に入る時代となった。坪谷氏がおっしゃったように教科書に書かれた知識はすでにその時点で古くなっている一方で新しい知識は、Internet を利用することが出来れば誰もが手に入れられる時代となった。情報化によって時代の変化がかつてない勢いで進み、20年後、30年後に必要とされる知識を我々教師が予測出来る時代ではなくなっているということがよく言われるようになったが、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもの65%は、大学卒業時に、いまは存在していない職業につくだろう」と予測する米国の経済学者もいる。その一方で急速に Global 化が進み、知識詰め込み型がよいとされる教育の価値観や有名大学に入り、安定した職業に就けば一生安泰といった職業観や社会的価値観が大きく揺らいでいる。このように未来がますます不確実なものになっている中で、知識や情報を選択し、価値観の異なる人々とも協力しながら、問題を解決していく力をつけ、一生学び続けられる人材を育てることを考えて行う教育は、今後ますます必要となる。今回の視察は20年後、30年後を生きる子どもたちに必要な力とは何かをよく考え、真剣に追求している学校本来の姿を思い起こさせていただくよい機会となった。

さて今回の視察で強く感じたことだが、東京インターナショナル・スクールとテンプル大学の教育には共通点があるように思える。それは知識を学ぶだけではなく、どのように活用し社会の中で使えるようにしていくか考え、自分の意見としてまとめ、正しく伝えると同時に異なる意見をもつ人たちとの Discussion を繰り返しながら相手の意見を理解するという Communication を重視し、分析・振り返りを繰り返し行う中で問題を解決していこうという姿勢と、どのように社会と主体的に関わることの出来る人材を育成することが出来るかを追求している点である。日本の教育では添え物的に扱われる芸術科目も人格形成にとって創造力を働かせる科目として重視していることも日本の教育とは大きく異なる点である。そして何より教師が Facilitator として振る舞うことを重視していることは日本との大きな違いであろう。

近年「プロ教師」という言葉をよく聞くようになったが、日本では授業の準備と研修に十分時間を割ける教員がいったい何人いることだろうか。東京インターナショナル・スクールでは、教員1人に対し40万円の研修費を拠出し研修日も認めている。教師は生徒の教育の向上にだけ徹し、事務仕事は全て事務員がこなしている。仕事における役割分担がきちんと出来ているので、授業の準備にも十分時間をかけることが出来る。しかも教科横断型の授業のため複数の教師が授業の進め方をめぐって Discussion をし、Coordinator が Curriculum(「10の学習者像」)に照らし合わせて Advice するので授業は協働作業である。この点、授業を Supervise してくれる人材がいることは頼もしい。ぜひ、私学でも Coordinator を置き各教科担当が意見校交換や Advice をしてもらえそうな制度を取り入れるべきである。

次に大学入試改革についてであるが、2015年6月時点までの文科省の発表を見る限りでは、米国型の入試に近いものになることが予想出来る。そこで今回テンプル大学を視察校として選び、米国大学の AO 入試について学ぶことで今後の入試改革に対するヒントを得ようと考えたのであるが、もしこの改革がそのまま進むのであれば、国公立大学も米国の AO 入試のように Admission Office にきちんと人員が割かれ学生1人ひとりをきちんと審査する形に変わっていくことが考えられる。日本の大学では人件費と入試時期が通年ではないことから Admission Office に割く人員が1人ないし2人であるというお話を聞いたが、願書受付が通年化すれば人員も増えるのではないだろうか。またこれと合わせ調査書の書式が大きく変わることも伝えられているが、入試形態が米国型に近づくことを考えれば当然のことであろう。教員の負担も増えるが、生徒も自分が入りたい大学に対し自分がいかに有益な人物であるかということを示す証明しなくてはならなくなる。Volunteer 活動など学校生活以外での活動が評価の対象と伝えられているが、部活だけの生徒にとって

は大変な要求となることだろう。学校だけではなく、保護者がよく考えてさまざまな活動に出るよう子どもを仕向ける努力も試されることとなるだろう。保護者に対する入試改革の告知も早めに行う必要がある。

最後に今回お世話になった東京インターナショナルスクールの坪谷ニューエル郁子代表、CoordinatorのChristine 女史、そしてテンプル大学の加藤智恵・竹本正二郎両氏に敬意を表し、この報告書に換えたいと思う。

(記録: 副部長 静岡学園中学校 山本岳弘)